

(1) 作文教育研究会

会 長 上田 浩稔 (中村南小)
事務局 大西 由香 (東中筋小)

1. 研究主題

「書く意欲を高める指導」

2. 研究経過

月 日	活 動 内 容	場 所
8月 6日 (金)	夏季研修会 報告：大西 由香 「心に残る実践 作文、詩の書かせ方」 実践発表・交流	中村南小学校
1月18日 (火)	学習会 ・「四万十川の子」校正作業 ・学習「児童・生徒の作品をもとにした『詩』 の読み方、書かせ方の指導について」 ・本年度の活動の反省 ・会計報告	中村南小学校

3. 今年度の取り組みより

① 夏季研修会

1 報告「心に残る実践 作文、詩の書かせ方」 大西 由香(東中筋小)

(1) 何のために書かすか (「機関誌『幡多作文』巻頭言 柿内 実先生」から)

「子どもの自己表現を助長するため」

(2) 子どもの作品をどう読むか

「子ども自身の中に発達のエネルギーがある」(幡作研究大会 浦木 秀雄先生講演から)

子どもの事実から出発し、あるがままの自分と向き合わせることで、子どもを高めていくこと。

「よりそう」とは、子どもの発達の原動力がゆがめられていることを共感的に受け止めて、その発達の原動力に自由を与えること。

(3) 詩の見方、書かせ方 ([児童詩集『やまもも』特集 城 藤吉先生]から)

何の何を書きたいか、どんな気持ちを書きたいか、一番言いたいことを。

一つの詩には、一つの気持ちを。

ある日、ある時、ある場所にピントを合わせて(焦点化)。

題つけ、場面の切り取り。

生活の中の「詩」(感動)に気づく子になる。感じる子になる。考える子になる。

個性的な見方、感じ方ができているか。

前置きや説明は省いて、ズバリ書き始める。

短く切って、はきはきと。

借り物でない、自分の言葉で。

生き生きした詩は、生き生きした生活から。

(4) 書く指導をどうするか

(5) 作文指導について (「幡多作・県作研究大会 渡邊 智穂先生公開授業」から)

予告をする(意図的な生活づくり)。

丸ごとお手伝い。

書きぶりの良さ(時間の順序や様子が伝わる場所)と同時に、作者の良さを読み合う。
作文年間指導計画から。

2 研究協議

- ・持続的な取組と、人間関係の大切さを感じた。子どもたちが自由にのびのびと書けている。「衣装や化粧ではごまかせない。」と言われていたが、子どもが思ったまま書くものと、考えさせ書くのとでは違うと思った。
- ・「ある子にしぼって、1年間つなげてみる。」ということが心に残った。子どもは、教師の鏡、教師の先入観、押し付けが分かる。子どもに寄り添って見ていく、子どもたちが活躍していけるように、仕向けていくことが大切。日記や作文も、書かせていないと、その子が出てこない。
- ・「お見舞いに行きたかった」作品が心に残った。お互いの文章をつなげ、子ども同士のつながりを大切にしていきたいと思った。学級で紹介することによって、理解を広げ、新たな関わりにもつながると思った。子ども達の作品を読んで、あたたかい気持ちになった。
- ・読み合うことで、学級みんなに呼びかける作品が生まれてくるのがいいなと思った。先生が読んでくれるから、つなげてくれる安心感がある。
- ・「やまもも」の作品を読み合って、学級の子どもの作品を読ませるようにしていきたい。
- ・「こういうふうにかかせたい」という思いがあって、いいところを見つけて返事を書けるようにしていきたい。
- ・週に1回だと子どもが書くことを嫌がる。書きたい気持ちが大切。絵から文字へと進むことで、書くことが楽しくなった。毎日書かすことで、子どもとつながってきた。

3 実践発表、交流

(1) 「Hさんの1年間を通して」 細木 葵絵(東中筋小)

1年生の指導を絵から始めた。Hさんは、毎日、自分と兄弟2人の絵を書いて、ノート1冊が終わった。それが、自分の言葉で少しずつ書けるようになり、だんだんと自分のことから友だちのことも書けるようになってきた。仲間に入ることができたからではないか。心が開放されてきた。自分を受け止めてくれる先生、友達がいるからのびのびと書けるようになってきたのではないか。

→1年間の変化が見える。先生の取組が、子どもを育てている。

(2) 「児童の日記から」 成田 暉(中村南小)

赤ペンが、子どもの意欲を引き出している。優等生の作文しか書けない児童がいるが、どうしたら、本音を引き出すことができるか。

→ほっとした失敗をみんなで共感する。ありのままでもいいことを伝えていく。

これまで書くことをしてきていない。手立てがあるか。

→絵から始めてはどうか。

出来事の羅列になる。どうしたらいいか。

→書くことを楽しみにしている段階。意欲を育てることが第1番。評価が意欲につながる。

書きたいことを書く。

→題を焦点化する。場面と気持ちにしぼってみる。

子どもの作品を読むことが楽しみである。一人の作文をみんなに伝えられていない(読み合っていない)のが課題である。

しかけることによって、逆効果になってしまった失敗がある。

本音で書けた文章を読んで評価したい。読ませたいが、読まれたくないという高学年の発達段階における課題もある。

→「〇〇たで賞」の文章をかごに入れていく。頑張りが見える化する手立てを工夫する。

(3) 「なんのために書かせるか」 山崎 充子(蕨岡小)

学期に2回、どの子の作品も載せることを目標に、通信を発行している。つながり(友達とも保護者とも関係作りができたかどうか)を大切にした作品を取り上げるようにしている。価値づけ、内面をとらえることができるように意識している。

(4) 「日記指導について」上田 浩稔(中村南小)

ゲームの日記ばかりでは、他の児童にも伝染していく。正直に良くないことを伝える。その上で、こんなふうには生活できないか、参考作品を紹介するようにした。だんだんゲームの作品はなくなった。

内容がない作品に対して、皆さんの良さが出ていない。もったいないと感想を伝えた。すると、変化が出てきた。

載せることの許可を得る。知るために書かす。人数が少ないので、文で話ができる。通信に載せている子は、普段話があまりできていない子。「載せてもいい?」と聞くと、「実はちょっと自信があったがよね。」と答える。感想を楽しみに読んでくれている。日記でつながることができる。評価することが大切。

赤ペンで気を付けていることは、後ろ向きな言葉も、ユーモア等のポジティブに変えて伝える。少しでも前に向いてくれる。

日記を出さないと、自主学に書いてきたりする。書く機会を与えていないと、子どもの事実、思いはわからない。一番は、安心感。先生や友達同士の受け止めてくれる仲間がある。それが、書く意欲につながる。認めてもらえるから書きたい。伝えたい。教えなくてはいけないこともある。

2 学習会・校正作業

(学習会より)

- ・自分の思いが素直に書かれている作品もあれば、感動が感じられない作品もあり、作品差があった。
- ・あったことがそのまま書けると、場面や様子が伝わる。その子にしかない体験が、読み手の心を動かす。
- ・中学年になると、思いが良くかけるようになっていく。書き出しがおもしろく、読みたくなる作品が多かった。
- ・概念的であったり散文的であったりする作品や、思いだけが先行して事実が書かれていない作品があったりと、感動を切り取る指導が必要である。
- ・中学生の応募を増やしたい。
- ・まずは、書きたい気持ちが大事にされなくてはならないが、表記の間違いが多かった(特にひらがなの長音、()の使用)。今年は、1行の長い作品が多く、表現方法である詩のリズムに馴染ませたい。

4. 今年度の成果と課題

(成果)・今後の実践に生かせる詩の見方や、書かせ方を学習することができた。

- ・作文教育の大切さを改めて確認することができ、実践への意欲につながることができた。
- ・児童生徒の作品を読みあうことで、指導方法や課題、改善策等について学び合えたことはよかった。

(課題)・「四万十の子」に応募する学校が限られている。参加校や応募数を増やしたい。そして、子どもの活躍の場である機会を活用してもらいたい。また内容や表現に、作品差があることから、でき上がった文集を通して、詩の見方、書き方の学びにってもらいたい。

- ・本会の活動を紹介し合って、「書くこと」の指導について学習したいという仲間を増やしていきたい。